

[月刊] 1988年6月18日第三種郵便物認可

トマ喰い虫

〒150 東京都渋谷区渋谷2-5-9 パル青山502
トマ喰い虫社

☎03(498)6095 044(63)5101
FAX.044(63)9907

No.52
90.2.20
定価 100円

月刊反トマホーク通信改題



板門店・国連軍第五哨所から「帰らざる端」(右端)と北の野山をのぞむ(2月5日撮影)。

太平洋に壁はいらない

ニック・マクレラン
の太平洋レポート

アメリカ西海岸の旅
空母の新母港化に反対
(ヨコスカ)

[発行] トマホークの配備を許すな! 全国運動

●維持会員(月間会費)

団体 1口 2000円
個人 1口 1000円

●参加会員(月間会費)

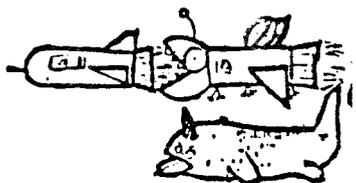
団体 1口 1000円
個人 1口 500円

●通信会員

年間 1口
2000円

あなたも仲間! (会費は本誌購読料を含みます)

編集室から



トマ喰い虫とは、神奈川県横須賀市の久里浜中学の生徒が考え出したトマホークを食べてしまう生き物です。今、世界中で繁殖している益虫なのだ!

●二月一日から七日まで、ソウルにいた。反トマ全国運動が参加している国際的なネットワーク、PCDS(海の軍備撤廃を!太平洋運動)の運営会議にオブザーバーとして参加した。カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、韓国、日本の七ヶ国から活動家があつまり、草の根国際協力の現状とこれからを議論したこの会議については次号以降であらためて報告があるだろう。韓国の反核・平和運動の人々と交流と意見交換もできた。大きな成果だった。

●会議の間を縫って、板門店(パンムンジン)に行った。ソウルから六五キロ、車でわずか一時間半。でも、韓国国民にとっては、ここは限りなく遠い場所だ。訪ねることができるのは外国人のみ。それも、二日前までにパスポート番号の申告が必要。一日一本の観光バスだけが板門店への「足」だ。案内書には「Tシャツ、ジーンズはだめ、きちんと整髪せよ云々」とあった。どういふことなのか。地雷原をぬけて着いたそこはまちがいになく冷戦の「現場」だった。日本語ガイドの女性は、国連軍(実は米軍)の勇敢さをたたえ、ときに口汚ないまでに「共和国」をのしつた。だまつてうなずく観光客たち。日本人が大半をしめるその群れの中に僕もいた。その日二月五日、統一を訴えて軍事境界線を北から南へ越えた女子大生林秀卿(イム・スギョン)さんに懲役十年の判決が下された。

●行きのバスの中で、ふと見ると寒さで曇ったガラス窓にピース・マークが書かれていた。板門店の将校専用食堂で昼食をすませてバスに戻ると、それはきれいに消されていた。(田巻一彦)

ベラウ国民投票

米との自由連合に七度目の「ノー」

二月六日、非核憲法で知られるベラウ共和国では、アメリカとの自由連合協定をめぐる七回目の国民投票が行われた。結果は、協定批准賛成が六〇・四%、反対が三九・二%、無効が〇・三%(開票率九〇%)。賛成票は憲法の定める批准に必要な七五%に届かず、自由連合は今回も拒否された。

アメリカによる信託統治終了後のベラウの政治的地位を定める自由連合協定は、経済援助と引き換えにアメリカに国土の半永久的な軍事利用を認める内容。核兵器や化学兵器の領内持ち込み・貯蔵を禁じた憲法とは決してあいれないものだ。

今回の賛成票のパーセンテージは、過去六回のどれよりも低い。前回(八七年八月)の七三%と比べると、自由連合推進の世論は大きく後退した。逆に反対票はこれまでで二番目に高い数字になった。

前回の投票の時には、協定推進派によって公務員を動員したキャンペーン、反対派に対

太平洋に壁はいらない

一月三十日に発表されたアメリカの新しい「国防報告」は「ソ連のアメリカ及び同盟国への侵攻の可能性は戦後最低」と述べた。アメリカの軍事費は要求ベースで前年度比二・六%減となった。

フィリピンのクラーク空軍基地、韓国の大邱、光州、水原基地の閉鎖、「チーム・スピリット」演習の縮小、岩国、沖縄の海兵隊の一部撤退、戦艦ニュージャーシー、アイオワなどの退役、在韓米軍の削減そして在日米軍の五〇〇〇人削減計画……

マルタでの合意は、ここ太平洋でも具体的な姿をあらわし始めた。しかしアメリカ政府がみずから告白するように、これらは戦力の合理化・効率化の色彩の方が強い。「前方展開戦略」は放棄されたわけではない。「軍縮」と同時進行で進められているのが海の軍拡であることは、日本の私たちが一番よく知っている。トマホーク艦二隻とミッドウェーにかわる空母インディペンデンスの横須賀母港化、

これが私たちが目の前にしている現実だ。日米政府によるタイコンデロガ事件の「幕引き」は、この事件が「終わっていない」からこそ必要だった。自民党安定多数という結果に終わった衆議院選挙では、「核」や「軍縮」は争点の「一つ」にすらならなかった。アメリカの矢継ぎ早の「軍縮提案」に日本政府は戸惑いながら、ああそうですかとうなずく。そればかりか、私の出番と「防衛分担」に乗り出す。

まるで冷戦終結から取り残されたような太平洋。取り残されたありようを作っているのは誰だろうか。理想も哲学もない、ただ金儲けだけの日本、そして日本人。もういいかげんにしよう。

ベルリンでそうであったように、太平洋に「壁」はいらない。それを突きくずすのはあなた、そして私。もう、戦争の機械はいらない。核艦船の母港はいらない。

する脅迫・放火、ついには暗殺事件まで引き起こされたが、今回はそのような圧力も影をひそめ、投票は平穏のうちに終わった。

非核憲法は守られた。しかし、安心はできない。自由連合推進派であるエヒソン大統領は敗北を認めながらも、「国民の過半数が自由連合に賛成していることは明白」と表明した。憲法を改正して、協定批准に必要なパーセンテージを七五%から五〇%にひき下げようという画策が再び始まっている。

もちろん、アメリカもベラウの軍事利用をあきらめていない。最近一部リークされた「国防政策指針一九九〇」は、フィリピンにかわる基地の候補地として、シンガポール、タイ、日本と並んで「太平洋のアメリカ領の島」をあげている。

非核憲法制定から十年。ベラウにデタントと平和の訪れる日はまだ遠い。

●WESPAC財団発行「ベラウ・アツプデイト」(チャールズ・シャイナード氏編集) #18と太平洋問題資料センター発行「パシフィック・ニューズ・ブレティン」二月号を参考にしました。五ページに関連記事。(編集部)



一九九一年に退役が決定している空母ミッドウェイに代わって、インディペンデンスがヨコスカを母港にすることが決まったという。冷戦終結も、データもどく吹く風、アメリカはそんなにもヨコスカがお気に入りなのか。ミッドウェイは十六年間ヨコスカに居すわった。いったい誰がこの母港を喜んだのだろう。厚木では艦載機による夜間離発着訓練による爆音の被害。その被害は三宅島におよぼうとしている。あるいは池子の米軍住宅建設。

インドペンデンスの母港に
反対しよう!

もう、 空母はいらない

●横須賀から

空母一隻分の人間がいなければ、住宅の不足なんてことははじめからおこらない。わかりきったことだが、空母は戦争のためのもの。そんなものが私たちの暮らしになじむはずがない。くりかえし問おう。いったい誰が母港化を喜んだのだ。

あるいは「国防」のためと政府はいう。しかしそれもウソだ。ミッドウェイが繰り返した軍事演習は、緊張を増幅することはあっても、「平和」のためにはなんの役にもた

たなかった。そして韓国・光州事件の時の緊急出動。それは文字通りの民主化への敵対だった。これがミッドウェイの母港化の前身だ。東ヨーロッパで起きている民主化の嵐は、世界が大きく変わりつつあることを、予告しているように思う。たとえば、力の強い国がその軍隊を同盟国(実際は多くの場合支配国、日本も例外ではない)に駐留させることは、もはや時代遅れなのだということをおぼろげに思っている。

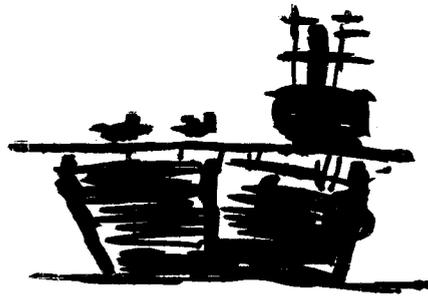
空母の海外母港は世界にたった一つ、ヨコスカだけだ。ミッドウェイの十六年につづき、さらに大型の空母インディペンデンスの母港を私たちが認めるとしたら、どこよりも「民主化」が必要なのは、私たちの町というべきだろう。

●ヨコスカ「定例デモニュース」第一
四七号(90・1・28)より転載。

ミッドウェイ後継に
インディペンデンス
米国防長官が表明
横須賀を母港とする米海軍第七艦隊の空母ミッドウェイの後継問題について、米国のチェイニー国防長官は二十三日午前、東京・内幸町の日本記者クラブで行ったスピーチの中でも「後継は太平洋配備の通常型空母インディペンデンスとする。ミッドウェイは来年夏までに退役させる、ことを明らかにした。

チェイニー長官が、空母ミッドウェイの後継艦をインディペンデンスとしたことについて、神奈川県横須賀市の横山和夫市長は二十三日、「地元にはさきい協議することなく、発言されたのは遺憾だ」と述べた。

(90.2.23)
「朝日」(9)



太平洋の島々をおおう 大国の影

ニック・マクレラン
(「パシフィック・ニューズ・ブレティン」編集者)

ご紹介ありがとうございます。

今、北太平洋の軍縮が世界から注目されています。ヨーロッパと同じように日本や韓国、フィリピン、太平洋地域でも大きな変化が予想されることは皆さんご存じの通りです。南太平洋の島々もこの変革の波に大きな影響を受けています。世界で初めて非核を宣言したペラウやバヌアツなど、非核を唱えるこれらの小さな国々は核兵器保有国からの様々な圧力に苦しめられています。

島々は第二次世界大戦の戦場になり、米國や日本から大きな被害を被りました。これらの国々の非核や軍縮への関心は、海と土地への愛着に根差したものです。人々は今でも土地に根差した伝統的な生活を送っています。ですから、自分たちの土地が基地にするため軍に取り上げられたり、食物や文化の源であ

る海が核で汚染されることに対して非常に敏感になっています。また、過去に植民地になった経験から大国に対する不信感を強く持っています。つまり、これらの国々にとって核の問題は独立・主権と深く関わっているのです。ある国は七十年以降独立を勝ち取りましたが、依然として植民地のままの国もあります。そこには、民族としての誇りやアイランダー(島しょ住民)としてのアイデンティティーの感情が非常に強くあります。

これらの国々は、自分たちの力を強めるために団結して様々な地域的な繋がりを作って活動してきました。たとえば一九七一年に設立された「南太平洋フォーラム」。南太平洋の国々すべてをカバーするこのフォーラムは核活動に対して強い反対の立場をとってきています。アメリカやフランスはこれらの連帯

セミナー連続
「太平洋へ」第1回(東京)
主催:「全国運動」での発言から
(文責:編集部)



をこわそうと圧力をかけています。現在、太平洋の島々では、独立と主権と軍事基地・施設をめぐって多くの深刻な対立がおこっています。

ここでは、四つの国々についてお話をしたいと思います。二つはすでに独立した国、あとの二つはまだ独立を勝ち取っていない国です。ミクロネシア諸島のペラウ、メラネシアに属し南太平洋の中心にある独立国フィジー、フランス領ニューカレドニア(カナーキー)、そしてパプア・ニューギニア(一九七五年までオーストラリア領だった国)です。



ベラウ

危機に立つ 非核憲法

ベラウから始めましょう。アメリカの四つの信託統治領の一つベラウでは、二十年間にわたって独立のための運動が続いています。一九七九年、ベラウは憲法を起草し、八十一年に承認されました。この憲法は非常に強い非核条項を含むものでした。核艦船の入港と一切の核活動を禁止し、これを変えるためには国民の七五%以上が同意しなければならぬとされているのです。一方、信託統治を終了させるために政府は米国との間で「自由連合協定」を結ぶための交渉をしてきました。この自由連合協定と憲法には大きな矛盾があります。自由連合協定は四〇〇ページに及ぶ非常に難解な文書ですが、経済援助と引き換えに米国に半永久的な基地使用の権利を認めるといふ、ベラウの人々の非核の願いとは大きな隔りのある内容のものであります。これを承認せよとの強い圧力がかけられています。

昨年一月、ベラウ議会にベラウの将来を考へる委員会が設置されました。その委員会では自由連合協定の軍事条項と憲法の非核条項

との矛盾を解消するための憲法改正は行わない、と合意しました。委員会のメンバーの一部が昨年の四月に訪米し、交渉の場を持ちました。そして、五月には副大統領が米領グアムに行き、「自由連合協定」への追加条項に合意しました。この特別条項でも、ベラウを軍事利用したいという米国の要望は取り消されていません。アメリカは海軍基地、空軍基地、さらにジャングル戦用の訓練場を作りた

* *

とされています。昨年の六月、米国議会は自由連合協定を批准しました。ベラウにも協定を批准するために再度国民投票を行えとの強い圧力がかけられ(それまで六度の国民投票が行われ、その都度自由連合協定は拒否されてきた。編集部)昨年七月、ベラウの下院は、国民投票を行う事を決めました。また憲法改正のキャンペーンが展開され、議会には憲法改正のためのロビー活動が活発に行われました。協定批准のために必要な国民の賛成率を七五%から五〇%に引き下げようとの狙いでした。このキャンペーンには多額の資金が投入されましたが、その出所は不明です。結局、このキャンペーンは失敗しました。十二月に議会と伝統的な指導者たちが集まって、このパーセンテージの変更は行わないことが確認されました。そ

フィジー

軍部に急接近 するフランス

フィジーでも非核に対する攻撃が行われています。

フィジーは七十年に独立し八十七年まで同盟党が政権を握っていましたが、八十七年四月、労働党を中心とする連合政権が成立しました。労働党勝利の大きな原因は労働組合政策、社会福祉、女性の権利の保障などでしたが、同時に労働党は非常に強い非核政策をとって、核艦船の入港禁止と非同盟運動への参加を公約していました。これに対して政権発足されてしまいました。街頭行動が禁止されたので、YWCAの建物の窓に反核の横断幕を出し、建物の中で昼休み集会を開催して抗議の意思をあらわしました。また、反核映画の上映も行われました。

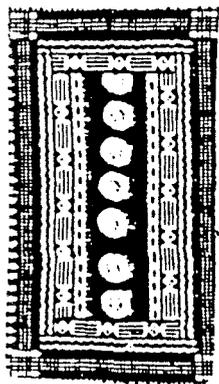
軍部は人々が反核を表明することを大変恐れています。スバ港(スバはフィジーの首都。編集部)にフランスの軍艦が入港した時にも抗議行動を阻止しました。軍はスバの近くのウドゥア・ポイントに海軍基地を新しく作る計画を発表し、フランスから巡視艇を買うことも計画しています。フランスはウドゥア・ポイントの海軍基地の建設のために二千万ドルの対政府援助を行ったとも噂されています。一九八七年にもその噂はあり、フランス政府はそれを否定しました。しかし、ロカール首相の訪問後では、この噂は真実だと多くの人々は信じています。

◆つづく

直後の五月に軍事クーデターが起こされ、政権は転覆されました。その後八十七年の十二月からこの一月までフィジーは軍事政権によって支配されてきました。政権は三つのグループから構成されてきました。同盟党、タウケイ運動(フィジー先住民の過激な民族主義を主張するグループ)そしてクーデターを起こしたランブカ中佐(現少将)を中心とする軍人たちです。政府は新しい憲法を制定しようと計ってきました。それは、人口の半分を占めるインド系住民から力を奪うことをねらうものでした。

* *

今年一月に三人の軍人は政府を辞職しましたが、依然として憲法も制定されず、政権の法的根拠も確立していません。注目しなければいけないのはフランスの動きです。フランスはクーデターを利用してフィジー軍部に接近して、フランスの太平洋での核政策に対してフィジーがとってきた批判的立場を止めさせようとしています。フィジーは南太平洋ではパプア・ニューギニアに継ぐ大きな国として、フランスの植民地政策や核実験に対して南太平洋フォーラムや国連の場で強い批判をしてきました。そこで、フランスは経済的、軍事的援助によってその立場をかえさせようとしているのです。



フランスはクーデターの後、ルノーのトラックを五十六台、さらにヘリコプターをフィジーに送っています。これらは経済発展や災害救助のためのものだと言われています。しかし、トラックのうち四十台は軍用に回されていますし、八台は警察が使っています。ヘリコプターを操縦しているのはフィジーの軍人です。昨年八月にはミシェル・ロカール首相がフランスの首相としては初めてフィジーを訪れました。私は、ロカール首相が訪問したときフィジーにいましたが、首相到着の五日前、フィジーのラジオは「ロカール首相の滞在中は、反核のTシャツを着ることを禁止する」と放送していました。到着の日、反核のTシャツを着て空港に行ったYWCAの会長は、その場で警察に逮捕されました。YWCAとFANG(「フィジー反核グループ」)は、抗議集会を計画しましたが、軍によって禁止

ニック・マクレラン氏はオーストラリア・メルボルン在住。民間の海外援助機関に働きながら各地を訪ね、非核独立の運動のために尽力している。非核独立太平洋運動の月刊機関紙「パシフィック・ニューズ・ブレティン」編集委員。海の軍艦撤廃を「太平洋運動(PCDS)」のオーストラリア代表。今回、ソウルでの同運動の運営会議の帰途来日し、東京と大阪で講演を行った。

反核ホット ライン だより

23

入港情報

90・1・23 2・20

P級II (原子力潜水艦パーミット級)
S級II (原子力潜水艦スタージョン級)
L級II (原子力潜水艦ロサンゼルス級)

(2・14) オマハ(L級) 正午 横須賀に入港

(2・19) パファア(S級) 午前9時30分
ホワイトビーチに入港
30分後の午前10時に出港

(2・20) オマハ(L級) 午前9時50分
横須賀を出港

*1990年2月20日現在各港への原子力艦の入港回数、
横須賀 2回(うち原潜2回)

佐世保 0回(うち原潜0回)
ホワイトビーチ 3回(うち原潜3回)
計 5回(うち原潜5回)

★お詫び:前号で今年の横須賀への入港回数を2回としたのは1回の誤りでした。

イージス入艦相次ぎ入港

米韓合同演習(チームスピリット)のからみで、相次ぎ垂直発射装置VLSを装備したイージス艦などが入港した。

(1・29) レイク・シャンプレン 佐世保に入港

(2・5) レイク・シャンプレン 佐世保を出港

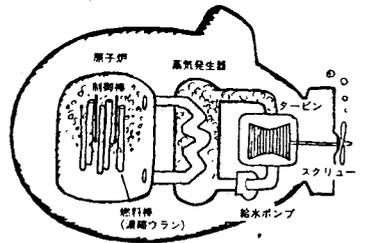
(2・12) レイク・シャンプレン 横須賀に入港

(2・18) レイク・シャンプレン 横須賀を出港

(2・19) ファイフ 佐世保に入港

(2・21) ファイフ 佐世保を出港

레이크・シャンプレンは、多目標を同時にミサイル攻撃できる最新の洋上防空イージスシステムを搭載したタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦で、同じイージス艦のピンセンスとは同型である。核弾頭付きの巡航ミサイル・トマホークを発射できる垂直発射装置VLS



を2基装備しており、核トマホーク搭載の疑いがもたれている。

また、ファイフは、トマホークを含むミサイルを計六一発発射できる垂直発射装置VLS1基を搭載した駆逐艦である。

레이크・シャンプレン、ファイフの入港で、佐世保には、核承認済艦7隻が入港したことになる。

これほど大量の核兵器が配備されれば、「万が一の事態」になれば佐世保や横須賀は当然、一連の攻撃対象になってしまう。そうなるまえに、私達の手で核兵器を廃絶させよう!

原子力艦入港情報 テレホンサービス

ブッシュホンで、まず 井8301、そして連絡番号 968・1071、次に暗誦番号 1071
クロハ イレナイ

アメリカ西海岸の旅(Ⅲ)

「アメリカの湖」に 面する基地群

その2

梅林宏道

(前号まで)

I テーマとして定着した北太平洋の軍縮
タイコンデロガ事件の国際性
PACEXへの関心
II 「アメリカの湖」に面する基地群 1
シアトル周辺
サンフランシスコ周辺

コンコード海軍兵器廠

トレジャー・アイランドのあと、北東に約四〇キロ走ってコンコード海軍兵器廠をみた。かねてから、ぜひ訪問したいと考えていた基地であった。

一九八七年六月以来、エル・サルバドルへの弾薬輸送に反対して、コンコードからポート・シカゴの桟橋に向かう線路で座り込みや抗議が続いていた。九月一日、座り込んでいた数人の抗議団に対して、命令を受けた弾薬輸送列車がスピードを落とさずに突っ込んだ。時速五マイルの制限速度の三倍のスピードであった。この恐るべき蛮行によって、ライダーのブライアン・ウイソン氏が轢かれて両足を失った。そのとき以来、そこでは一日二四時間体制で座り込みが続けられている。彼らの行動はニュールンベルグ・アクシオンと呼ばれる。

『私たちが線路に座り込んだり、弾薬輸送トラックを止めたり、あるいは基地のなかに入りこんだりするとき、私たちは法に不服従をしているのではない。むしろ私たちは、非暴力の方法で法の侵犯を止めようとしているのである。私たちは、この行動を国際法と精神法へのへ市民的服従と呼ぶ。』

右手に海軍兵器廠の正門を見てしばらく行くと強い日差しの中にバラソルが見えた。数人の男女が屯している。そこが座り込みの場所であった。思わず厳肅な気持ちに身が引き締まった。

案内の在米韓国人の鄭民(チョン・ミン)さんは、七月の朝鮮半島南北平和行進にウイソン氏が参加したついで、この場所は三度めの訪問であった。現在座り込みの中心的な世話をしているジェニファア・ビーレックさんが私たちを出迎えた。彼女は、ウイソン氏としばしば言葉を交わしたことがあるハリソンという海軍少佐の変死について語った。海軍少佐は、議会の調査会でこの事件について証言をした翌日に、自宅でむごたしく殺されていた。

二つの裁判が続いている。一つは言うまでもなくウイソン氏殺害未遂の軍の責任を追及する裁判である。ところがもう一つの裁判というのは、こともあろうに海軍側が、ウイソン氏と一緒に座り込んでいた同志がウイソン氏を突き飛ばしたとして告発したものであった。

数日後、温厚な一人の老人と戦争抵抗者同盟の会合に向かう車のなかで偶然に出会った。彼は私をその会合に連れていってくれる運転手であった。話をきいていて彼が海軍に告発

会計報告

(90. 1. 17~2. 19)

[収入]	
○前月からの繰越	△ 16,114
経常繰越	233,886
借入金繰越	△250,000
○今月の収入	198,793
会費収入	100,000
内	
維持団体	10,000
維持個人	38,000
参加団体	0
参加個人	8,000
通信会員	44,000
カンパ収入	38,000
行動収入	0
資料収入	3,310
反核ホットライン収入	1,420
アンケート調査収入	56,000
雑収入	63
[支出]	
●今月の支出	△111,059
家賃(1月分)	50,000
水道光熱費	10,086
電話代	5,922
郵送料	37,041
文具代	0
印刷費	1,980
行動費	3,100
資料経費	0
反核ホットライン経費	0
アンケート調査経費	0
郵便振替等手数料	2,930
●次月への繰越	71,620
経常繰越	321,620
借入金繰越	△250,000

サンジエゴが巨大な産軍複合都市であることは、港を見るまで実感できない。空港には日本人観光客が溢れ、街の雰囲気は南国のリゾート地のようなであった。サンフランシスコ近辺の印象が、カリフォルニアのイメージとかけ離れていたのに対して、ここはまさにそ

サンジエゴ周辺

る。世界初の原子力潜水艦ノーチラス号が一八九〇年に退役した場所でもある。ここで、今回の基地見学の旅で唯一回、基地のガードに見とめられ、外からの撮影すら禁止された。紙面の都合で詳しい報告は割愛する。

しかし港と基地を見たとき、印象は全く一変する。アメリカ海軍機構の巨大さとそれを支える軍国思想の根強さに圧倒される。正直言って、こんな海軍と戦った日本は何と無謀で狂信的な国だったのだろうと思わざるを得なかった。

サンジエゴ平和資料センターのキャロル・ジャーンコウさんが、私を先ず案内してくれたのは、港とノースアイランド(今では陸続き)を一望できるカプリコ国立公園であった。視界よく晴れていたが、遠方が霞んで良く見えないほどに広大な入江のほとんどの海軍基地で占められている。横須賀の場合と地形が

全く異なるので比較が難しいが、基地の海岸線を丸くはかった長さが、横須賀の場合、吾妻島、浦郷地区も含めて約一〇キロであるのに対して、ここは約五〇キロに達する。しかもそれが凹凸の少ない形で展開しているのスケールの大きさは相当なものである。

アメリカ海軍の軍艦の二九パーセントがこの母港にしている。ハーバー・クルーズと呼ばれる遊覧船に乗った。海軍基地や軍艦の一つ一つを誇らしげに説明する声が流れる。キャロルの話だと説明員によつては、核兵器を積んでいるとさえ説明するそうである。「写真撮影はすべて自由です」と言われた。

すでに述べたように、PACEXのために基地は異例にすいていたという。それでもここを母港にする三隻の空母のうちの一隻レンジャーやトマホーク艦メリル、原子力巡洋艦トラスタンなど馴染みの船を含めウンザリするほど多くの軍艦が港には浮かんでいた。まだ建造中のイージス艦もあつた。空母艦載機のための海軍航空基地は、ノースアイランドとミラマーの二箇所であり、日本と同じように演習を繰り返していた。しかし、広大な面積と緩衝地帯のために騒音被害は軽減されているように見えた。

日を改めてロサンゼルスに近いシエラビー

されている当人であることが分かった。物静かに淡々と語る彼の語り口を聴いていて、私は言い尽せないような感情にとらわれた。権力への押さえることの出来ない憎しみと、人間の善意への深い敬愛の気持ちが入り交じったものであつた。

コンコードの悲劇が、こんなにも深い社会的な根を持つていることを、私はそこを訪問することなしには知ることが出来なかつただらう。

ジエニファーに案内されて、彼女たちが「核区域」と呼んでいるバンカーを見た。核兵器の積み出しに使われると思われる棧橋も見た。今後、ここを出る船と日本に来る船と照合し合うことを約束してコンコードに別れを告げた。

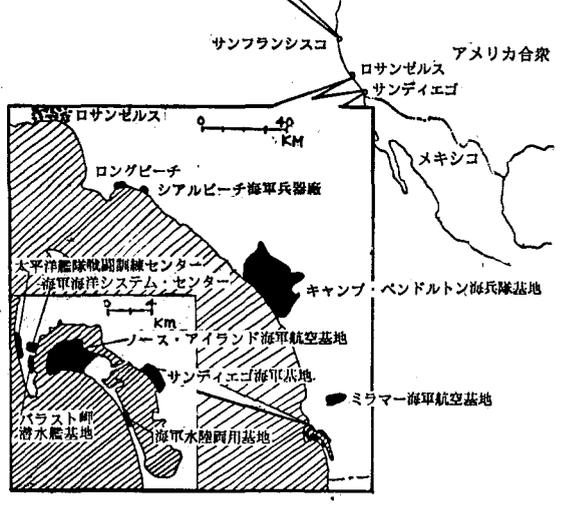
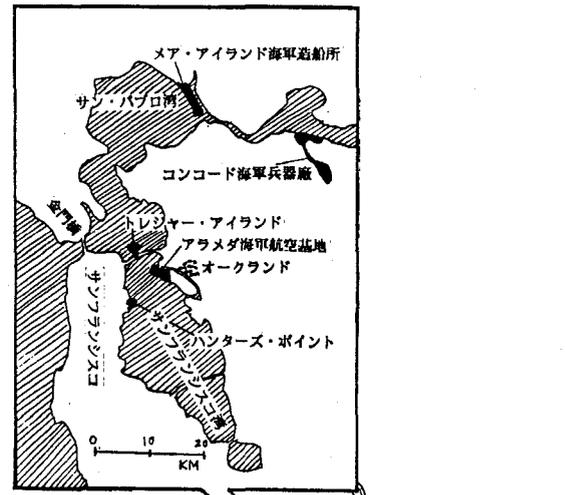
アラメダ海軍航空基地

陽も傾きかけたころ、アラメダ海軍航空基地を訪れた。ここはサンフランシスコ湾の軍事化の心臓部である。エンタープライズとカールビンソンという二隻の原子力空母の母港であり、アーカンサス、テキサス、カリフォルニアという三隻の原子力巡洋艦もここを母港にしている。

エンタープライズがいた。夕日の加減で見えにくかつたが、65の軍艦番号が識別できた。ブリッジのもう一方の側には、賞を獲得したことを誇るEの文字が大きく書かれていた。甲板には、大勢が作業をしていた。

あとで知つたのだが、この二日後にエンタープライズは出航した。サンフランシスコ湾

という私の要求で、鄭民さんは、地図を頼りに車を走らせた。そして何人かの太公望が釣り糸を垂れている突堤に行き着いた。車を降りて足場の悪い岩場をどんどん海の真ん中へと歩いて行くと、そこは誠に格好な軍艦ウオッチングの場所であつた。



地域ピースネイビー(ここでは平和船団をこう呼ぶ)のボブ・ハイフェッツが「原子炉の燃料交換のために東海岸へ向かつた」と確信を持って語つたので、私はエンタープライズはPACEXに参加しないと判断した。日本に帰つたとき、私はこれを多くの人々に伝えたが、結果的には誤りであつた。この種の情報は十分に吟味しなければならぬことを、改めて肝に銘じた。

翌日、ネルソン・フォスター氏の案内でメア・アイランド海軍造船所を見た。正面にアメリカ海軍最初の造船所(一八五四)を記念する大きな錨が飾つてある由緒ある場所であ

新刊パンフレット 生命の海へ

非核・独立の太平洋ベーシック

ニック・マクレラン
ロベティ・セニトウリ
オーエン・ウィルクス

話題の国々

バヌアツ/フィジー/
東チモール/ペラウ/
ニュージーランド/
カナーキー/タヒチ

ファクト・シート

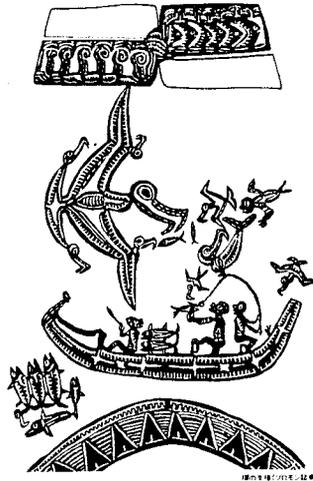
南洋庁/日本占領/基地/
核実験/海洋投棄/
ODA/笹川財団/
遠洋漁業/NFIP/PCDS

資料

非核憲法/非核法/
非核地帯条約/
非核独立太平洋憲章/
倉成ドクトリン

伝説

地図・統計



読んで・見て・知る 太平洋

編集 ● 「生命の海へ」
編集委員会
発行 ● トマホークの配備
を許すな! 全国運動
定価 ● 600円
(10部以上500円)



チ海軍兵器廠、ロングビーチ海軍基地を訪れたが紙幅も尽きた。その途中で見たキャンブ・ペンドルトン海兵隊基地について一言触れて終わりたい。その面積は五一〇平方キロ、つまり淡路島より少し小さいだけの山あり谷ありの広大な基地であった。ここでは、戦争の演習ではなく、戦争そのものを行なうことが出来るであろう。

今回は、基地と環境問題を報告する。

投稿歓迎!

★編集部では、皆さんからの投稿をお待ちしています。★紙面へのご意見、提案、随想、近況報告なんでも結構です。★締切りは毎月十日。★字数は二〇〇〇字まで。★お名前を公表してよいか、あるいはイニシアル、ペンネームをお忘れなく。

求ム! スタッフ、助っ人

●編集から印刷、発送まで「トマ喰い虫」はすべて手作りです。ミニコミ作りに興味ある人、平和運動の新しい情報に触れてみたい人、イラストやデザインをやってみたい人、とにかく何かやってみようと思ってるあなた! 大歓迎します。

●発送を手伝ってくれませんか? 毎月20日直後の日曜日、トマ喰い虫社分室(東横線日吉駅下車044-63-5101)で。次回は

3月25日(日)午後2時から。

月刊トマ喰い虫 第五十一号
月刊反トマホーク通信改題 改題第 号
一九九〇年二月二十日発行(通巻五十二号)

*発行 トマホークの配備を許すな! 全国運動
〒一五〇 東京都渋谷区渋谷二一五十九
バル青山五〇二 トマ喰い虫社
☎〇三(四九八)六〇九五
〇四四(六三)五一〇一
FAX〇四四(六三)九九〇七
郵便振替 東京六一三六一四八
*編集 トマ喰い虫編集委員会
*定価 一〇〇円(通信会員年間二〇〇円)